

失うことの輝き 安田百合絵

「短歌」三月号の特集は「青春と短歌——あらゆる可能性を生きる」と銘打たれ、青春歌についてのエッセイや座談会などが掲載されている。その特集中の論考で、荻原裕幸は寺山修司の「海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり」の情景が「できすぎ」であることを指摘しながら、「この、やや芝居がかった表現」が好きだと述べている。少し長いが引用したい。

こんなに美しい情景がどれも個人の体験によるもののはずがない。そう思いながら、しかし、私もこんな美しい情景のなかを生きてみたいと感じさせてくれる。読者は、寺山とフィクションを共有するのではなく、願望のかたちを共有しているとも言ったらいだろうか。

好みの問題はさておき、青春を詠った多くの歌が名歌と呼ばれ愛誦されてきたのは、この「願望の共有」によるのだろうかということは今回の特集で改めて実感した。

・恋しさの闊けてゆく午後目にみえぬ速度に冬の花はほぐるる

横山未来子『樹下のひとりの眠りのために』

・空の端ちぎって鳥にするような痛みひとをおもいそめたり

大森静佳『てのひらを燃やす』

恋しさの漸増は、冬の花のゆっくりとした芽生えに重ねあわせられ、人を思うことの痛みは、空の端を「ちぎって鳥にする」とい

う激しいが卓抜な比喩によって忘れがたいものとなる。読み手はそこに自らの青春を重ね、あるいは共感し、あるいは自分にそうした青春がなかったことを悼み、それによってつかの間自らの来し方を振り返ることになる。たとえそこに若さゆえの切実な苦しみが表示されていても、その痛みすらも「願望」を掻きたてるということは不思議ではあるが、いずれにしても優れた青春歌は、丹念に分析すれば、たんなる放恣の発露ではなく、読者を「願望の共有」へと誘導しうる冷徹さや明晰さ、抑制といったものをどこかで必ず兼ね備えているはずである。

したがって、青春歌は若者の特権ではなく、極論すれば詠み手の年齢とは関係ないとも言えるのかもしれない。青春を歌うことは誰にでもできるし、年齢を重ねることは、「若さを回想する自己」を歌うという重層性を可能にする。

・なつかしき君なき年の春に遭ふこの心より哀れなる無し

与謝野晶子『夏より秋へ』

・悲しみに一途でありし少女期の尾を濡らしつつ夜の髪洗う

鈴木香代子『青衣の山神』

さらに、虚構を通して青春を歌うということもできる。

・僕はまだ少年だった 草原をスーホの白い馬駆けてゆく

・斃れたる白馬のあり たてがみはさざなみとなり夜を渡るも

喜多昭夫『悲しみの捨て方を教える』

物語世界の人格を引き受けることで、人は老いてなお少年とすることができる。しかしこの歌の白眉は「僕はまだ少年だった」の過去形ではないか。過ぎ去った若さが、歌に深みを加える。失うことによつてしか見えない輝きも在るといふことなのだろう。